

2016 年度卒業生のみなさんへ

皆さん、ご卒業・修了おめでとうございます。それぞれの課程を修めて今日を迎えた皆さんに心からお祝いを申し上げます。

ところで、今年度の大学・短期大学部の卒業生が併せて 400 名に満たないことに寂しさを感じる向きもあろうかと思えます。かつて、24～5 年前には本学の志願者は 1 万人を超え、毎年の入学者数も 700 名に届いたこともあったようです。ところが、18 歳人口の低下を背景に大学間の競争が激化しました。その過程で、残念ながら本学は往年の社会的評価を維持することができず、年々入学者数を減らしていきました。本日卒業される皆さんが入学した頃が、もっとも底をついた時期であったようです。私が学長として着任したのはちょうどその頃です。

当時を振り返ってみますと、このキャンパスはなんとなくよどんでいました。朝、学生同士あるいは教職員と学生が顔を合わせても、挨拶を交わす姿が見られませんでした。学生たちの多くはなんとなくおずおずと毎日を過ごしているように見えました。おそらくこの大学に入学するまで、あるいは入学をはたしてさえも、褒められることがなく、したがって「自信」が持てず、「達成感」を味わうことがないままここに至っている学生が多いのではなかろうか、という印象でした。キャンパスの中で、学生同士の凄惨な殴り合いなど、すさんだ出来事も起きました。

私は、今、このキャンパスに、当時のような淀んだ空気がなくなったことを、そして、朝から夕暮れまで、すがすがしい挨拶が交わされ、元気な女子学生の笑い声が聞こえていることを大変嬉しく思います。この 5 年間、教職員や学生の意識を変えるために様々な試みを行ってきました。何が功を奏したのか特定することはできませんが、キャンパスが全体として、明るい方向へ変わったことを皆さんも感じているのではないのでしょうか。

一昨年から 2 年にわたって、それぞれ 100 名を超えるアジアからの外国人留学生を受け入れました。これは間違いなくキャンパス活性化の一因になったと思います。

また、この数年間に、犬山市、小牧市の市民の皆さんと本学との交流や協力の営みが随分広がり、深められました。今年は、大学の近くの田んぼをお借りして、学生のグループが米作りに挑みました。近隣のお百姓さんが、田植えから、草取り、稲の刈入れまで、文字通り手取り足取り指導をしてくださいました。収穫した 300 キロ余りの「名経米」は、本学の食堂を通して皆さんに振舞

われたことは記憶に新しいところです。

秋の大学祭にもたくさんの市民の皆さんに訪れていただけるようになりました。犬山、小牧両市の様々な祭りやイベントでの学生の皆さんの多彩な活動のお蔭で、地域に密着した名古屋経済大学の姿が出来上がってきたように思います。

今年度はまた、強化指定のスポーツクラブの活躍に目覚しいものがありました。男子バスケットボール部の「天皇杯」出場、本学から初めてのプロ野球選手が誕生など嬉しいニュースが続きました。このようなスポーツクラブの活躍とそれを担った部員の皆さんが、このキャンパスに活力をもたらしてくれたことは間違いありません。スポーツクラブのみならず、学生の皆さんの多様な活動において、上級生であった本日卒業の皆さんが、その牽引車として力を発揮してくれたことと推測します。

さて、この数年間に、私たちが一番力を入れてきたのは、皆さんの学びについての改革でした。私たちの意図のすべてが実を結んだとは思いませんが、様々な折に皆さんに語ってきたいいくつかの大事なことを、本日の門出に当って皆さんに思い起こしていただけると幸いです。

ひとつに、今日のような変化の時代には、覚え込んだだけのたくさんの知識はやがて役に立たなくなるかもしれない。そこで大事なものは、物事の基本的な考え方、基本的な原理をしっかりと学び取ること、「学ぶ力・考える力」を磨くことだ、ということです。また、皆さんにしっかりと胸にとどめていただきたいのは、皆さんにはまだまだ成長の余地が、伸びしろがあるということです。何らかの、あるいは誰かとの出会いがきっかけとなってあなたの新たな成長が始まる、遅れや躓きをリカバリーするチャンスはやってくるということです。皆さんには、これからも学び続ける姿勢を忘れないでいただきたいのです。

さて、私は前任の大学から通算しますと、今年で13回、毎年3月の卒業式で学長として送る言葉を述べてきました。毎年、私は皆さんの行く末が希望に満ちた時代であることを願い、無条件に卒業と出立をお祝いしたいと思うのです。しかし、手放しで皆さんのご卒業を祝い、出立を激励することは、この13年間、一度もできませんでした。なぜなら、皆さんが向き会わなければならない社会あるいは世界は、必ずしも皆さんに優しく、居心地のよいものではないからです。今年も、私はこれまで以上に大きな心配を禁じえません。

「世界戦争の世紀」であった20世紀を後にした21世紀は、異なった国々、異なった民族や宗教の共存・共生を旨とする時代であることが、多くの人々の

願いでした。ところが、今日の国際社会でも武力紛争やテロが後を絶ちません。くわえて、特定の国や民族や宗教を差別し、「壁」や「敵」を作ることによって自らの力を誇示するという、分断と対立の政治文化が世界各地に蔓延しつつあります。

最近、「資本主義」という今の経済システム全体が行き詰まりに近づいている、と説く書物が目につくようになりました。心ある経済学者が、今の経済システムの深刻な問題として指摘するのが、「格差」の拡大です。自由な市場における競争を基本原理とする「資本主義」は、放っておくと富める者の富の巨大化と貧しい者のますますの貧困化を生み出します。そこで、例えば累進課税によって是正して国民の間の公平・公正を実現し、あるいは社会的弱者を救済する社会保障政策を充実して社会の安定を図る役割が「政治」に求められるのです。しかし、昨近の日本の政治は、口先だけの約束やスローガンだけで、経済の不合理的な改める機能を停止ししています。

さらに、例年に増して私が心配なのは乱暴な政治の手法です。日本の政治は「立憲主義」を背骨としています。「立憲主義」とは、主権者である国民が（国民を代表する議会が）定めた憲法に従って政府が政治を行うという大原則です。ところが、憲法に従った政策の実行を義務付けられている政府（内閣）が、憲法の解釈を勝手に変え、ひいては「憲法改正」を提言するという、本末転倒がまかり通っているのです。

皆さんの行末と関わって大きな心配は、皆さんの「仕事」の問題です。この数年間、名古屋経済大学は「一人ひとりの学生を仕事につなぐ大学です」を標語に、キャリア教育、キャリア支援に力を入れてきました。これは単に「就職のいい大学」としてウケを取るためではありません。

今日、日本の社会では、アルバイト、パート、契約社員、派遣社員など「正社員ではない非正規雇用の労働者」が40%を占めています。「多様な働き方」などといって合理化されることがありますが、「非正規雇用労働者」は安い賃金で、単純労働の繰り返しを強いられ、スキルアップの機会も与えられず、期限が来ると解雇されます。彼らは、このような「非正規雇用」をつなぎながら一生を送ることを余儀なくされます。

私たちは、この問題を重く考えています。これから数十年にわたって日本の社会を支えていく皆さんが、それぞれの「仕事」を通して社会にしっかり根を下ろすことが、これからの皆さんの人生にとって、そして、日本の社会の将来にとって、大変重要だと考えるからです。「一人ひとりの学生を仕事につなぐ大学です」を標語に、キャリア教育、キャリア支援に力を入れてきた理由はそこ

にあります。

毎年の卒業式で私は、皆さんに、この社会にあって「ヤドカリのように暮らしてはならぬ」というメッセージを送っていきました。「ヤドカリ」とは妙なものを引き合いにだしましたが、これは、近代化が押し寄せつつあった1950年頃のトルコで、ひとりの詩人が、幼い息子に宛てた詩の一説なのです。詩人は、「この地上に生きるにはヤドカリのように暮らしてはならぬ。この世で生きるには父親の家に住むように生きるのだ」と諭しました。

皆さんには、自らの仕事を通して社会にしっかり根を下ろして生きていきたい、ヤドカリのように、他人の抜け殻を渡り歩き、きよろきよろしながら世の中を渡っていくのはならぬ、という意味です。

皆さんが生涯を通して「自分にふさわしい職業や仕事を探す」ということは大事なことです。しかし、周りをきよろきよろしながら「自分にぴったりの、自分の好みの仕事を」と探しても、滅多にみつかるものではありません。また、たとえ「自分にマッチしていると思う就職先や会社」を選ぶことができたとしても、「好きな仕事」だけをしながら一生を過ごせるものでもありません。

じつは、職業あるいは就職先は「自分の選択」というより、「出会い」という側面が大きいのです。ですから、「出会った」職業や会社と、この後数十年にわたって「どのように付き合い、そこにどのような自分の生きがいを見出していくか」ということが、むしろとても大事なのです。出会った職業との真摯な向き合いの先に、「これが自分の仕事だ」という究極の出会いをつかむことができるのだと思います。

皆さんには、出会いを得たそれぞれの職業を通して社会としっかりつながり、ヤドカリではなく、「社会の主人公」として生きていただきたいのです。どうか、皆さん、困難な時代に負けず、理想を失わず、社会の主人公としてそれぞれの人生を堂々と生きてください。

皆さんのご健康とご活躍を心から祈ります。